

# 災害心理研究所活動報告書

所 長 筒井 雄二

## ○研究目的

当研究所は原子力災害によって引き起こされる放射線被ばくに対する不安や恐怖など、心理学的影響の問題について研究を行っています。また、心理学的影響に関するメカニズム、心理学的影響をより小さくするために有効な心理学的対処方略、原発災害が引き起こす長期精神影響の問題や、原発事故以外の災害研究に関する知見の原発事故被災地・被災者への適用等を考慮した研究を推進しています。これらの研究活動を通して福島県の復興のために貢献していくことを目指します。

## ○研究メンバー

<研究代表者（研究所長）>

筒井雄二（福島大学共生システム理工学類・教授）

<研究分担者（プロジェクト研究員）>

高谷理恵子（福島大学人間発達文化学類・教授）

原野明子（福島大学人間発達文化学類・教授）

<連携研究者（プロジェクト客員研究員）>

氏家達夫（放送大学愛知学習センター・特任教授）

元吉忠寛（関西大学社会安全学部・教授）

本多 環（福島大学地域未来デザインセンター・客員教授）

## ○研究活動内容

**事業1：避難指示が解除された故郷への帰還が避難者の精神健康とレジリンスの改善に与える効果に関する研究**

日本政府は福島県内の帰還困難区域の一部の避難指示を解除し、住民の帰還を目指す事業（特定復興再生拠点整備事業，環境省）を開始しました。令和4年より葛尾村，大熊町，双葉町では帰還が始まり，令和5年には浪江町，富岡町，飯舘村でも帰還が始まりました。これまで

長期にわたり故郷に戻ることをできなかった避難者にとっては，やっとな自分の故郷に戻ることのできる待ちわびた帰還であり，政府にとっても福島復興が前進していることをアピールする事業でもあります。しかし，被災者の精神的健康を考えた場合，そこには必ずしも喜ばしいとは言えないような側面もあります。故郷に帰還するということは，①低線量とは言え，放射線による被ばくの影響を受けながらの生活をするのであり，②避難先で避難後に築かれたコミュニティや人間関係が再分断されることによる精神的負荷が考えられ，③帰還したとはいえ，以前とは大きく変わってしまった故郷での生活であり，学校や病院など社会的インフラも以前のように戻っていない状況の中での生活です。このような状況での帰還は，精神影響の加算モデルに基づくならば，精神的健康の憎悪を引き起こす可能性すら予想されます。そこで，事故当時，浪江町に居住していた方を対象に彼らの精神的健康の状況を継時的に調査し，被災者の方がこれ以上，心理学的影響を受けないよう対処方略も含めて検討する研究事業を行うこととしました（筒井，令和6年度科学研究費補助金 基盤研究(C)）。

## **事業2：コロナ禍におけるファミリーホームの養育者の専門性に関する研究**

以下は，コロナ禍でのファミリーホーム（小規模住居型児童養育事業）の養育者の意識変化から，ファミリーホームにおける家庭養育と家庭的養育について考えたものです。この研究は，「急激な社会変動が子どもの発達や家族関係に影響を与える（E.M.パーク，1997）」を踏まえ，2011年に発生した東日本大震災や2020年以降に新型コロナウイルスが招いたいわゆるコロナ禍での困難な状況下での保育者や保護者の意識の変化を探ってきた研究の一環でもあります。

ファミリーホームの養育者が保育者と保護者の役割を兼ねるところもあることから，コロナ

禍での意識変化やコロナ禍以前の経験がどう活かされたかをアンケート調査により尋ねることで、その専門性を探りました。

その結果、衛生管理や部屋の隔離、遊び等、施設（保育所を含む）職員の経験があることがコロナ禍での生活に役立っていました。また、ホーム外の社会資源の活用をしていたりと、里親経験だけではないある種の専門性がコロナ禍でのホームの運営に反映されている可能性も示唆されました。同時に、虐待を受けたり障害などのある児童、すなわちケアニーズの高い子どもが増加していることから、コロナ禍での生活の難しさも指摘され、それに応じる専門性が今後さらに必要となることを考察しました。

（原野明子・半沢まどか 2023 小規模住居型児童養育事業（ファミリーホーム）における養育者の専門性とは：コロナ禍での生活を通して考える、福島大学人間発達文化学類附属学校臨床支援センター紀要, 8, pp. 31-40.）

### 事業3：洞穴探検プログラムが参加者の自己概念の変容に与える効果に関する研究

新型コロナウイルスの流行が私たちの日常生活や人間関係の在り方を大きく変えてしまいました。緊急事態宣言のもとで学校は休校となり、デパートや映画館など、閉ざされた空間に多くの人々が集まることに対して私たちは警戒するようになりました。「三密回避」が合言葉となりソーシャルディスタンスが日常生活にもとめられた結果、私たちは常に人と人の距離を意識するように生活するようになりました。また、飛沫やエアロゾルに閉じ込められたウイルスが空中を漂い、感染を広げる可能性が指摘され、私たちはいつでも室内換気に気を付けながら生活をするようにもなりました。

感染症に怯えながらの日々を過ごしてきた人々は、この間、アウトドアでの活動がソーシャルディスタンスや換気の問題に対処するうえで効果的であることに気づくと同時に、室内に閉じこもりがちな生活に変化を与え、新しいレジャーとしての認識も広がり、キャンプや大自然の中でのアクティビティへの注目が高ま

りをみせています。

ところで、大自然の中での活動には「美しい景色」とか「小鳥のさえずり」といった五感を刺激する要素や、気分をリフレッシュしてくれるレジャーとしての要素、体力を維持し、向上させる健康増進効果のほかに、心理学にみても重要な効果があることが指摘されています。例えば、橋(1989)は女子大学生に冒険キャンプを経験させると、それによって思考傾向にポジティブな変化があらわれ、「物事の結果は自分ではコントロールができず、運によってきまる」という消極的思考から、「物事の結果を、自分の努力や能力によってコントロールできる」という前向き思考に変わることを証明しています（Locus of Control といいます）。また、川村ら(1979)は大学生におけるキャンプの経験が学生たちの自己概念を変化させ、自分を「頼もしく」「たくましく」「強く」「積極的で」「大胆で」とあるととらえることができるようになることを証明しています。

このような心理学的効果は、キャンプなどに含まれる「冒険的要素」が関与している可能性が指摘されています。1941年にイギリスで設立された Outward Bound School(OBS)は、その理念において「非日常的でチャレンジングな活動は人々が自分に秘められた可能性に気づき、自分や他者、そして社会をよりよくしていくため、大切にしていくための力を育む」とし、世界中で冒険プログラムを実践しています。

本研究では福島県が誇るあぶくま洞における洞穴探検プログラムを立案し、その経験がもたらす心理学的効果について検証しました。あぶくま洞のシュラーインケイブは、一般には未公開のエリアであるため照明等の設備はなく、その自然な状態の洞穴にはいることは、まさに冒険そのものであると言っても過言ではありません。あぶくま洞シュラーインケイブは、まさに冒険プログラムを実践する場としてふさわしい潜在力を秘めており、今回は青年が自分

自身をどのようにとらえ、どのように評価するかという「自己概念」と「自己評価」の発達に与える影響に焦点をあて、検証しました。

冒険プログラムに関する実験的検討は、ストレスフルな体験が人々の心をどのように変化させるのかを心理学的に明らかにすることを可能とし、災害研究の応用的要素が含まれると判断し、今回の研究に取り組むことといたしました。同時に、福島県の観光資源を利用した研究は、福島県の復興にも寄与する可能性を秘めており、そのような意味でも本研究に私たちが取り組むことが重要であると考えています。

#### **事業4：令和6年能登半島地震の被災者のための心のケアに関する情報提供**

令和6年元日に発生した能登半島地震の被災者に対し、特に子どもたちに起こる可能性のある心の問題への対処に焦点をあて、1月6日からホームページを通じて対処、対応方法について随時、情報発信を行っています。これらの内容は国内の災害心理、発達心理、幼児教育、社会心理、認知心理の専門家から新規に集めた災害対策に関する情報であり、また、私たちが東日本大震災の際に行った研究結果に基づき発信された情報です。福島大学のホームページのトップページにもリンクを貼っていただき一人でも多くの被災者に情報が届くよう心掛けました。